

乳海攪拌神話とラグナロク

沖田瑞穂*

はじめに

インド神話の中で常に争いあうとされている神々とアスラが、不死の飲料アマリタを得るために協力して海を攪拌したという乳海攪拌神話(amrita manthana)⁽¹⁾は、二大叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』、また諸プラーナ文献などに様々なヴァリエーションで語られている。この神話の主要モチーフが何であるかについて、研究者の意見は一定ではない。オフラハティは「典型的なカオスからの創造神話」と位置づけるが⁽²⁾、上村勝彦は「一種の創造神話であるが、主題はむしろ不死の飲料アマリタの出現とそれをめぐる神々とアスラたちの争いにある。それに、日蝕・月蝕の起源を述べる説明神話が付け加えられている」と述べている⁽³⁾。定方晟は、山を攪拌棒として海をかき混ぜるといふ動作に、牛乳を攪拌してバターやチーズを作り出す遊牧民の生活がにじみ出ている⁽⁴⁾、と述べている。海を攪拌による創造という点では、わが国のオノゴ

口島神話と似たところがあり、その系統的関連も指摘されている⁽⁵⁾。本論では、主に『マハーバーラタ』の乳海攪拌神話を取り上げ、この話が世界創造の神話であるだけでなく、世界の大規模な滅亡を語る神話でもある点に着目し、北欧ゲルマンの神話「ラグナロク」との比較を試みる。そしてその比較によって、原インド・ヨーロッパ語族が、世界の滅亡と再生を物語る神話をその共住期においてすでに持っており、各地に拡散した後も、インドと北欧の地でその神話を語り伝えた可能性を示したい。

1 『マハーバーラタ』における乳海攪拌神話

まずは『マハーバーラタ』の神話を、話の進行に応じて次の五つの要素に分けて詳しく見ていきたい(第一巻第十五章〜第十七章)⁽⁶⁾。①乳海攪拌の動機、②攪拌のための準備、③攪拌、④乳海から発生したものの、⑤神々とアスラの闘争。

①乳海攪拌の動機

バラモンのシャウナカが吟遊詩人に問う。「神々はどのようなにして乳海を攪拌したか。最高の馬ウツチャイヒシュラヴァスはどこから生じたのか。」吟遊詩人は語る。

最もすばらしい山、不動のメール山は、おびただしい光を放ち、黄金に輝くその頂上は、太陽の光をも凌駕するかのようである。黄金によって輝かしく飾られ、神々とガンダルヴァが住む。広大で、克服しがたく、不徳の人々によっては思い描くことすら及ばない。恐

ろしい獣たちが徘徊し、神々しい藁草がこの山を輝かせる。その巨大な山は天空を覆って高く聳え、通常の者には心の内に思い浮かべることさえできない。木や山がたくさんあり、さまざまな種類の愛らしい鳥たちがさえずる。多くの輝かしい宝石を貯蔵する、無限に聳えるこの山の上方に、天界の住人、苦行と自制に専心する神々が、アムリタを求めて集まって (amrita arthe samagamya I, 15, 10c) そこに座って相談を始めた。このように神々がいろいろと相談をしている時に、ナーラーヤナ (ヴィシュヌ) がブラフマーにこう言った。「神々とアスラたちによって、海が攪拌されるべきである。その攪拌されている海から、アムリタが生じるであろう。神々よ、海を攪拌しなさい。あらゆる葉草とあらゆる宝石を得てから、アムリタを手に入れなさい。」

② 攪拌のための準備

(神々はヴィシュヌの言葉に従って、大海を攪拌するための準備に取り掛かった。彼らはまず攪拌のための支柱となるマンダラ山を引き抜きに行った。)

最高の山であるマンダラ山は、雲の峰のような山の峰によって飾られ、つる草の藪に覆われている。様々な鳥たちが鳴き、多くの牙のある動物に満ち、キンナラ、アプサラス、神々が住んでいる。一万一千ヨージアナの高さに聳え、大地の下にもそれと同じだけ潜っている。神々はそれを引き抜くことができず、ヴィシュヌとブラフマーのもとへ行って、頼んだ。「あなた方二人は、どうか良い知恵を出して下さい。我々の幸福のために、マンダラ山を持ち上げるため

に努力をして下さい。」ヴィシュヌとブラフマーは共に「そうしよう」と言った。ブラフマーは竜王安ナンタを促して立ち上がらせた。ヴィシュヌはこの強力な蛇に仕事を命じた。アナンタはマンダラ山を、そこに住む生き物たちもろとも力づくで引き抜いた。神々はその山を海へ運び、海に言った。「我々はアムリタのために水を攪拌しようと思う。」すると海は「私にも分け前をください。そうすれば、マンダラ山をかき混ぜる大きな衝撃に耐えましょう」と答えた。次に神々とアスラは亀の王アクーパラーに言った。「あなたがこの山の支点となって下さい。」亀は「そのようにしよう」と言って、背中を差し出した。インドラは道具 (yantra) によってその山の頂上 (agra) を削った (abhipid-)。

③ 攪拌

マンダラ山を攪拌棒とし、ヴァースキ竜王を引き綱として、神々とアスラたちはアムリタを得ることを望んで、こぞって水の宝庫である海をかき混ぜ始めた。大アスラたちは蛇王の一方の端につかまった。神々は皆一緒に、蛇の尾のある方に立った。アナンタ竜王は神聖なナーラーヤナがいる所にいて、その蛇頭を何度も持ち上げては、投げつけた。蛇のヴァースキが神々によって強く引かれると、煙と炎を伴う風が、何度もその口から出た。その煙の塊は、雷光を伴う雲の群となった。それらは疲労と熱でやつれた神々の上に雨を降らせた。マンダラ山の頂上から花の雨が降って、あらゆる方向から神々とアスラに花を降り注いだ。神々とアスラがマンダラ山で海を攪拌していると、大きな雷鳴のような大音響が生じた。様々な種類の水の生き物たちは、巨大な山に押しつぶされて、海の中で幾百と

なく死に赴いた。水中や海底に住む生物たちに、山は破壊をもたらした。この山が回されている時、大きな木々は鳥と共に、互いに擦れ合って山の頂から落ちた。それらの摩擦から生じた火は、炎をあげて何度も燃えながら、雷光を有する黒い雲のようなマンダラ山を覆い、逃げ出した象や獅子たちを燃やした。そして様々な生物たちは皆死んだ。神々の王インドラは、ここここで燃えている火を、雲より生じた水によって、あらゆる方向から鎮めた。すると様々な種類の大木の樹液や、多くの薬草のエキスが海の水に流れ出した。不死 (amrita) の力を有するこれらの液体 (rasa) の乳液から、そして溶け出した黄金から、神々は不死 (amaratvam) に至った。海の水は乳となった。最高の液体 (rasa) と混ざったバター (ghrita) が乳から生じた。

神々は、座っている恵み深いブラフマー神に言った。「我々も、アスラや蛇たちも、とても疲労している。ヴィシュヌなしでは、アマリタは生じない。この海の攪拌はもう長い間行われている。」ブラフマーはヴィシュヌに、「彼らに力を与えてください、あなたは最後の頼みです」と言った。ヴィシュヌは答えた。「この仕事に従事する全ての者に私は力を与えよう。皆で海を攪拌しなさい。マンダラ山を回しなさい。」ヴィシュヌの言葉を聞いて力に満たされた彼らは、大海の乳をさらに強く攪拌した。

④ 乳海から生じたもの

海から太陽が生じた。次に、冷たい光線を有する清涼な月が生じた。その後すぐに、グリタ (バター) から白い衣を着たシュリーが生まれた。さらに、酒の女神スラー、白馬、アマリタから生じた神聖な

宝珠カウストゥバが現われた。光線で輝くカウストゥバは、聖ナーラーヤナ (ヴィシュヌ) の胸にある。シュリー、酒の女神、月、そして思考のように速い馬は、太陽の道に従って、神々がいる所に行った。次に美しいダヌヴァンタリが、アマリタの入った白い水瓶を携えて誕生した。この大いなる奇跡を見て、アスラたちに、アマリタを求めて大きな騒ぎが起こった。これは私のものだ、と言いがら。すると幻術 (マヤー) を用いて魅力的な女の姿に変身したヴィシュヌは、アスラたちに近づいた。愚かな彼らは喜びながら、アマリタを彼女 (ヴィシュヌ) に与えた。

⑤ 神々とアスラの闘争

アスラたちは武装して神々を攻撃した。神々はヴィシュヌが取り戻したアマリタを受取って飲んだ。その時、アスラのラーフが神々に混じってアマリタを飲んだ。月と太陽がそれを見て神々に告げた。ヴィシュヌはアマリタを飲んでいるラーフの頭を円盤で切った。アマリタはラーフの喉まで達していたので、頭だけは不死となった。ラーフの頭は月と太陽を恨み、今でもそれらを呑み込む (日月蝕の起源)。

その後、海岸で神々とアスラの恐ろしい戦闘が開始された。武器がぶつかり合い、恐ろしい怒声がいたるところで聞こえた。その時、ナラとナーラーヤナが戦闘に加わった。ナラは矢で、ナーラーヤナ (ヴィシュヌ) は円盤で闘った。彼らの活躍で神々は勝利し、アマリタを大切に保存した。インドラと神々はアマリタの貯蔵庫の守護をキリーティンにゆだねた。

2 カリ・ユガの終末——人間の墮落・劫火・洪水

乳海の攪拌は最初のユガであるクリタ・ユガに行われたことになっているので(6, 76, 18)、この神話が一種の創世神話であることは間違いない。しかしここで注目しておきたいのは、乳海から、太陽と月をはじめとする世界の重要な諸要素が出現する前に、世界の崩壊の様子が詳しく記述されていることである。攪拌の綱となった竜王ヴァースキの口から煙と炎を伴う風が発生し、マンダラ山による摩擦のために様々な種類の水の生き物が死に、木々や鳥は擦れ合って山の頂から落ち、摩擦から火が生じ、炎を上げて燃えてマンダラ山を覆い、火にあぶり出された象や獅子を燃やした。そして、「様々な生き物たちは皆死んだ。」⁽⁸⁾ 創造に先立って全てが混沌に帰せられるのである。常に争いあう神々とアスラがこの時だけ協力体制を築くこと自体が、混沌の状態、一切の区別が無い状態であるとも言えるだろう。こうして世界を混沌に戻してから、新しい世界が生成する。乳海攪拌神話は創世神話であるだけではなく、世界の破壊と混沌への回帰、そしてそこから再創造の神話である。

『マハーバーラタ』の乳海攪拌神話に語られるこのような世界の崩壊の様子は、同じ『マハーバーラタ』が記すカリ・ユガの終末の様子と似ている。カリ・ユガが終わりに近づくと、すべてが悪しくなる。人々は嘘つきになり、四つのヴァルナは混乱し、バラモンもクシャトリアもヴァイシヤもシュードラも己のダルマを捨てる。生き物が増え、女たちは多産になり、地方には塔が林立し、四つの辻はジャッカル(あるいは死体)に満ち、牝牛はわずかな乳しか出さず、樹木はわずかな花と実しかつけない。インドラ神は季節に応じた雨を降らせず、すべての種子は正

しく成長しない。『マハーバーラタ』はおよそ三十詩節にわたって世界の衰退の様子を描写する(3, 186, 24-55)。「よいよユガの終わりに至ると、長年にわたる旱魃が生じる。地上の生物たちは氣力を失い、飢え、ほとんど滅亡する。七つの燃え立つ太陽が海や川のすべての水を呑み干す。乾いたものも湿ったものも、全てが灰燼に帰す。そして劫火(samvataka)が世界に襲いかかり、大地を裂いて地底に入って竜の世界を焼き、地下にあるすべてのものを滅ぼす。燃え上がる火は、神、アスラ、ガンダルヴァ、夜叉、蛇、羅刹など、一切を焼く。そのあと、稲妻に取り囲まれた多彩な色をした様々な形の雲が立つ。その雲は恐ろしい音を響かせて天地を覆い、全地を洪水で満たし、恐ろしい火を消す。大雨は十二年間続き、海は氾濫し、山々は砕け、大地も砕ける。雲は強風に打たれて突然姿を消し、空も無く、世界は大海原に帰す。(3, 186, 56-78) 以上のようなカリ・ユガの終末は、主として次の要素から成り立っている。

- 1 人間世界の墮落と混乱
- 2 旱魃と火による世界炎上
- 3 雲の発生と大洪水

これらの要素のうち2と3、つまり火と雲と大雨の発生は、『マハーバーラタ』の乳海攪拌神話において、二度繰り返して表れている。第一に、神々とアスラがヴァースキ竜王を引いた時、竜の口から炎を伴う煙が発生し、煙の塊が雷光を伴う雲になり、雨を降らせた(1, 16, 15-16)。第二は、山と海が攪拌されている時、摩擦から火が生じてマンダラ山を炎上させると、インドラが雲より生じた水によって火を鎮めた(1, 16, 22-24)。「マハーバーラタ」の乳海攪拌神話の前半部分では、世界の終末が強く意識されていると言える。

カリ・ユガの終末を構成する1の要素、人間世界の墮落の様子は、『マハーバーラタ』の乳海攪拌神話には語られない。しかしプラナーナの所伝には、この要素がはっきりと表れている。『ヴィシュヌ・プラナーナ』第九章では、神々が乳海を攪拌することになった原因として、シヴァの化身とされるドゥルヴァーサス仙によるインドラへの呪いと、インドラの失権による世界の衰退の様子が語られている。

シヴァの化身であるドゥルヴァーサス仙が地上を旅していた時、彼はヴィドヤダーラ(半神族)の女の手の中に、天上の木に咲く花で作られた神々しい花輪を見た。その芳香は森全体に漂い、森の住人たちが楽しませていた。恐ろしい誓戒を守るドゥルヴァーサス仙は、その輝かしい花輪を見て、腰つき美しいヴィドヤダーラの女に、それを請うた。華奢な手足をした大きい眼のヴィドヤダーラは、敬意を持って彼にお辞儀をしてから、花輪を与えた。それを受け取ると、恐ろしい姿をしたドゥルヴァーサスは、自分の頭に花輪を置いて、大地を徘徊した。ある時彼は、象アイラーヴァタに乗り、神々を従えた三界の王、インドラが近づいてくるのを見た。ドゥルヴァーサスは自分の頭から、酩酊した蜂をとまなう花輪を取って、神々の王に投げた。インドラはそれを受け取ると、アイラーヴァタの頭に置いた。アイラーヴァタは酔いで盲目になり、芳香に魅せられて、手で(その花輪を頭から取って)匂いを嗅いでから、地上に投げた。最高の聖仙ドゥルヴァーサスは激怒して、インドラに言った。「力に奢った悪しき心を持つ者よ、あなたは愚かである。私が与えたシユリーの住処である花輪を享受しなかったのだから。あなたは私の

好意に対して返事もせず、前へ進み出て私に敬礼もしなかった。喜びで頬を膨らませて花輪を自分の頭に置かなかった。私が与えた花輪を大したものだと思わなかった。愚か者よ。今、三界の幸運(smi)は消滅するだろう。インドラよ、あなたは私を、他のバラモンと同様に劣ったものであると考えた。傲慢なあなたは私に不敬をなした。私が与えた花輪が地面に落とされたように、あなたの三界も幸運(taksmi)を失うだろう。私の生来の激情は、全ての生類に恐れられる。その私を、あなたは傲慢さによって怒らせたのだ。」(217)

ドゥルヴァーサスに呪われたインドラは、急いで象から降りて聖仙の許しを請うたが、相手はその恐ろしさと気難しさによって名高いドゥルヴァーサスである。彼はインドラを決して許さず、その場を去った。インドラは象に乗って自分の居城アマラーヴァティーに帰った。ドゥルヴァーサスの呪いはすぐに効力を発した。

インドラと三界は、繁栄を失い(nisrika)始めた。植物や藁は、呪われて枯れた。祭式は行われず、苦行者たちは苦行を行わなくなった。贈り物などの法に、人々は心を留めなくなった。欲望などによって感官を妨害された全世界の生類は力を失い(nihattva)、取るに足りないものとなった。力(sattva)のある所に幸運(taksmi)はある。幸運(bhuti)は力に従う。どうして幸運を失った者(nihrika)に力(sattva)があるのか。力なしに、どうして美質(guna)があるのか。人間たちにとって、美質なしに力や勇氣は生じない。力と勇氣に見放された者は、全てに見放される。幸運を失い力に見放された三界において、栄光を失った人間たちは、知

性をも失った。(26-31)

このようにして三界が繁栄を失うと、人間世界の墮落と混乱が起こり、そこで、ダイティヤとダーナヴァは神々へ攻撃を始めたと言われている。戦闘に破れた神々は火神を先頭にしてブラフマーに助けを求めた。ブラフマーは神々を連れてヴィシュヌのもとへ行った。神々の讃歌に答えて姿を現したヴィシュヌは、こう命じた。「神々はアストラと協力して、あらゆる種類の薬草を乳海に投げ入れなさい。そしてマンダラ山を支柱とし、ヴァースキ竜を引き綱として、共にアムリタのために海を攪拌しなさい。ダイティヤの協力を確保するために、彼らと和平を結び、労働の報酬を均等に分けることを約束するのだ。アムリタを飲めば強力に、そして不死になれるだろうと言ってアストラたちを欺くのだ。私は彼らがその貴重な飲料を手に入れることがないように注意している。アストラたちは労働だけに加わることになるのだ。」そして神々はアストラに協力を申し出て、共に乳海を攪拌した。

『マハーバーラタ』と、以上のような『ヴィシュヌ・プラーナ』の所伝を合わせて考えると、乳海攪拌神話には、ユガの終末を構成する三つの要素がすべて揃っていることになる。

3 ラグナロク

世界の破壊と新生の神話としては、北欧ゲルマンの伝えるラグナロクが想起される。この神話には、乳海攪拌神話を構成する主要な要素の幾つかが表れており、両者にはよく似た構造が見出されるように思われる。¹⁰ 「巫女の予言」のラグナロクは、バルドルの見た不吉な前兆によって

始まる。その夢は現実のものとなり、誰からも愛される美しきバルドルは、神々の集会所で、神々に取り巻かれる中、盲目のホズがロキに唆されて放った宿り木に射抜かれて、命を落とす。これは神々にとって最大の損失であった。そのあと世界は翳りを見せる。東の森では老婆が狼を育てていて、その中の一頭が太陽の破壊者となる。その怪物は神々の住まう天を赤い血で染める。幾夏か太陽の光は黒くなり、風は悪しくなる。巨人と神々と人間の世界で、予兆を知らせるかにように雄鶏が鳴く。ガラム犬は吠え、フェンリル狼は枷をちぎって逃げ去る。非情の世、戦の世になり、兄弟同士が戦い殺しあい、従兄弟たちは同族を裏切る。世界は没落に向かう。人はだれも他人を思いやらない。

神々の世界では、ヘイムツダルの吹く角笛が警鐘を鳴らす。老いたトネリコのユグドラシルは震え呻吟する。ロキが束縛から解放される。ヘル支配する冥府では全ての者たちが恐怖に震えるが、やがてスルトの血族（火）がそれを呑み込むことになる。東の海からフリユムが来る。やはり東の海からムスペルの民がロキに先導されてやって来る。南からはスルトが来る、火をたずさえて。

オージンはフェンリルと戦い、倒れる。彼の息子ヴィーザルが狼の心臓に剣をつきたてて父の仇をとる。フレイはスルトと戦う。トールはミズガルズ蛇を倒すが、この毒蛇から九歩退いたところで息絶えた。太陽は黒くなり、大地は海に沈みゆき、天からは明るい星たちが消える。火と炎が高く燃え天に至る。

スノリも「ギェルヴィの惑わし」五一章において「巫女の予言」とほぼ同じ内容を伝えている。ただし最初に語られる「大いなる冬」は、「巫女の予言」には見られないモチーフである。

「大いなる冬」(フィンブルヴェトル)と呼ばれる冬が来る。雪があり

とあらゆる方向から吹き付け、霜はひどく、風が強く吹く。フィンブルヴェトルは三度も続く。その前に別の冬が三度続き、世界中に大戦争が起き、兄弟や親子でさえ殺しあう。狼が太陽を呑み込む。別の狼が月を取る。星は天から消え、大地と山々は震え、樹木が大地から根こそぎに抜け、山は崩れる。この時、フェンリル狼は自由になる。海は、ミズガルズ蛇が陸に上がるうとするために激しく陸地に押し寄せる。巨大な狼フェンリルは目と鼻孔から火を噴き出し、ミズガルズ蛇は毒を吹き出す。フリユムがナグルファルに乗って海からやって来る。天が裂け、ムスベールの息子たちが駆けてくる。彼らの先導をするのはスルト、彼の前と後ろには燃える火がある。ロキとフリユムもやって来る。フリユムには霜の巨人が同行し、ロキにはヘルの間人がみんなついて来る。

これに続く神々と巨人たちの運命の戦いの様子は、「巫女の予言」とほぼ同じである。最後にスルトが大地に火を投げ、全世界を焼き尽くす。スルトの炎が世界を燃やしたあと、海から緑したたる大地が現れる。そこでは種を播かなくても穀物が実る。ヴィーザルとヴァーリが生き残り、トールの子モージとマグニも現れる。彼らは槌ミョルニルを携えている。バルドルとホズが生き返ってくる。彼らはともに腰をおろして語り合う。そしてかつて神々が遊んだ黄金製の盤上遊戯の駒を見つける。人間たちの中で、二人の男女が森に身を潜めてスルトの炎から生き残る。二人は朝露を食べ物にする。彼らから人間たちが生まれる。北欧神話では女性である太陽は、狼に呑まれる前に自身と同じように美しい娘の太陽を生んでいた。そしてその娘がまた母親の軌道をめぐりはじめる。

4 乳海攪拌神話とラグナロク

「巫女の予言」とスノリが記すラグナロクの様子は、インドの乳海攪拌神話における世界の破壊と新生の様子と、多くの要素において一致を見せているように思われる。以下に、それらの要素が二つの地域の神話の中でどのように対応するか、見ていきたい。

i 太陽の異変

「巫女の予言」は、ラグナロクの最初の前兆として、太陽の異変について語っている。神々と巨人の運命の対決が始まる前、雄鶏の鳴き声や、繋がれた怪物の逃走や、人間界の混乱などの前兆の前に、狼が森で老婆に養われていて、そのうち一頭が怪物の姿をして太陽を呑み込むことになる(四〇〜四一)。「ギェルヴィの惑わし」五一章では、最初の前兆である「大いなる冬」が過ぎると、狼が太陽と月を呑み込むとされている。「マハーバーラタ」に記されているカリ・ユガの終末においては、太陽は七つになり全地を焼く。

ゲルマンの終末では太陽が消え、インドでは複数に増える。この差異は北欧とインドの気象条件の違いから生じたものである。一方は酷寒の地であるから太陽の消滅を恐れ、他方は酷暑の地であるから太陽の力の増大を恐れる。その方向性は正反対であるが、世界の終末に伴って太陽の異変が意識されているという点では、一致していると言えるだろう。「マハーバーラタ」の乳海攪拌神話では、アマリタの出現の後に、アスラのラーフによる日月蝕の説明神話が述べられている。ヴィシユヌに首を切り取られたラーフは太陽と月を逆恨みして、今でもそれらを呑み

込むのである。太陽を呑み込む怪物という観念は世界中に広く見出され、上述のように「巫女の予言」もスノリも、太陽(と月)を呑み込む狼について語っている。しかしどういうわけか、それらは日月蝕とは結び付けられていない。アクセル・オルリックによれば、北欧では太陽を呑み込む狼は蝕よりもはるかに頻繁に現れる別の現象と結び付けられた。太陽光線が雲を突き破って生まれる色とりどりの光の斑点が太陽付近に現れるという現象である。これは北欧の全ての国に見られるごく一般的なものであり、デンマークでもノルウェーでも「太陽狼」と呼ばれているのだという⁽¹¹⁾。太陽と月を追いかけて日月蝕を引き起こすラーフト、太陽(と月)を呑み込む北欧の狼は、比較できる余地を含んでいるように思われるが、ここでは措くことにする。

ii 人間の墮落

「巫女の予言」とスノリはともに、世界の本格的な終末に先立つ人間の混乱について語っている。戦の世となり、血族の絆が失われ、親子兄弟、従兄弟の別なく殺しあう。『ヴィシヌヌ・プラーナ』の乳海攪拌神話ではインドラの失権に伴って人間界の衰退が述べられている。また『マハーバーラタ』に記されるカリ・ユガの末世も、人間の墮落から始まるとされている。

iii 神々と巨人の戦い

ゲルマンでもインドでも、神々は宿命の敵(巨人族/アスラ)と恒常的な対立関係にある。両者は常に争いあい、その抗争は躍動的に神話を彩る。ラグナロクと乳海攪拌神話では、その敵対関係に大きな変化が起こる。ラグナロクにおいて、神々と巨人族は運命の対決を迎え、共に滅

びるが、乳海攪拌神話では全く逆に、両者は例外的に一つの目的のもとに協力関係を結ぶ。このように恒常的な敵対関係が、一方では決定的に他方では一時的に、という違いはあるものの、ともかく解消されているという点では共通していると言えるだろう。

iv 蛇の吐く毒

トールはミズガルズ蛇と戦いこれを倒すが、この蛇から九歩退いたところで毒のために死んだ。『ラーマーヤナ』では、神々とアスラがマンダラ山を攪拌棒として一千年間乳海をかき混ぜていると、綱のヴァースキの頭から猛毒が吹き出て、火のように全世界を毒で焼きつくそうとした。シヴァがその毒を飲み込んで神々と世界を救った。『ブラフマーンダ・プラーナ』、『バーガヴァタ・プラーナ』でも攪拌に伴ってヴァースキから毒が吐き出されている⁽¹²⁾。

v 世界炎上

ラグナロクの終末の決定打がスルトの火であったことには、「巫女の予言」もスノリも一致している。このことはエッダの他の詩からも確認できる。「ヴァーフスルーズニルのことば」十七〜十八では、巨人のヴァーフスルーズニルがオージンに、「スルトと神々の戦いの行われる野はなんという名だ」と問い、オージンは「スルトと神々の戦が行われる野はヴァイグリーズという名だ」と答えている。また、「ファーフニルのことば」十四では、瀕死の竜ファーフニルに英雄シグルズが、「スルトとアース神が剣の露(血)をまぜる島は何というのだ」と問うており、ここでもラグナロクにおける神々の敵の首領として、火を携えてやって来て、全世界を燃やしたスルトの名のみが挙げられている。

『マハーバーラタ』の乳海攪拌では、火の発生が二度にわたって述べられている。一度目はヴァースキ竜の口から吹き出た火炎、二度目は山と海の摩擦によって生じた火である。この二度目の火が全世界を焼き、生類を滅ぼしたとされている。カリ・ユガの終末でも、様々な不吉な前兆の後に世界を破滅させたのは火であった。

vi 海からの世界の新生

スルトの火が全世界を焼き尽くしたのち、「巫女の予言」でもスノリでも、海から新しい緑の大地が現れる。オージンやトールの子らが生き残り、バルドルとホズが生き返り、新しい世代の神々の時代となる。彼らは新しい世界に盤上遊戯の黄金の駒を発見する。それはかつて神々が遊んだものであった。「巫女の予言」八によると、アース神族の始まりの頃、ヴァン神族との戦も、巨人族との争いもなかった頃、神々は草地で盤上遊戯に興じ、黄金作りのものに取り囲まれていた。盤上遊戯と、黄金とが、アース神の歴史の始まりと、新生した世界の始まりに共通して現れている。これは、ラグナロクが、直線的な時間観念のもとに生じた一度きりの出来事ではなく、破壊と再生を繰り返す円環的な世界観のもとに語られていることを示唆している。このことは、「ギルヴィの惑わし」において、生き残ったトールの子モージとマグニが、トールのミョルニルを持っていてとされていることから窺うことができる。ミョルニルは戦神トールとほとんど不可分の武器であり、彼はこの武器で巨人族と戦った。そのミョルニルを手を持ったトールの子らは、これから始まる新しい神々の歴史の中で、かつてのトールのように、神々の敵たちと戦う戦神の機能を果すのかも知れない。

乳海攪拌神話でも、やはり海から新しい世界の構成要素が出現する。

ヒンドゥー教の円環的な世界観のもとでは、四つのユガの進行とともに、人も神も世界も永久に生成と破滅を繰り返す。乳海攪拌は最初の時代であるクリタ・ユガに行われた。そして攪拌に伴う破壊の様子は、最後のユガであるカリ・ユガの終末のそれと酷似していた。このことは乳海攪拌神話が、何度も繰り返し行われる宇宙規模の破壊と創世の神話であることを示している。

vii 太陽の更新

『エッダ』の「ヴァフスルーズニルのことば」四七によれば、太陽はラグナロクで狼に呑み込まれる前に娘を産んでいて、その娘が新しい世界で母親の軌道をめぐる。新世界の生成とともに、太陽の更新が語られている。乳海攪拌神話でも、攪拌によって全ての生類が滅んだ後、乳海から太陽と月が出現している。

おわりに

ラグナロクに関しては古くから膨大な研究がなされており、キリスト教やゾロアスター教の終末論の影響を認める研究者もいる。しかしデュメジルは、『マハーバーラタ』の主筋の物語、すなわちパーンダヴァとカウラヴァの抗争とそれに続く大戦争、そしてユディシュティラによる王国獲得と治世の話の全体と、そこで活躍する英雄たちの役割が、ラグナロクの神話と構造的に一致していることを指摘し、それらの話の起源が原インド・ヨーロッパ語族にあると考えた¹⁸⁾。ヒルテバイテルも同じ立場から『マハーバーラタ』とラグナロクを比較し、「死んで蘇る若き英雄/神」としてのアビマニユとバルドルの対応など、興味深い類似点を

指摘している。⁽¹⁴⁾

本論ではそれらの先行研究を踏まえ、『マハーバーラタ』の挿話の一つである乳海攪拌神話を、壮大な円環的世界観に基づく破壊と再生の神話であると捉え、他の諸文献の異伝も考慮しつつ、この神話の全体的な構造とそこに含まれる幾つかのモチーフを、ラグナロクと比較した。その結果、両者のあいだに注目すべき共通点があることを示すことができたとと思われる。このことから、デュメジルによって指摘された『マハーバーラタ』の主筋の物語に加えて、二大叙事詩とプラーナ文献に語られている乳海攪拌神話にも、原インド・ヨーロッパ語族に遡る古い神話が受け継がれているものと推定することができるように思われる。

注

- (1) 海を攪拌してアムリタを得ることを簡単な形にして *amṛta manthana* (アムリタ マンタナ) と言う。
- (2) Wendy Doniger O'Flaherty, *Hindu Myths*, Penguin Books, 1975, p. 273.
- (3) 『インド神話』東京書籍、一九八一年、六四頁。
- (4) 定方辰『インド宇宙誌』春秋社、一九八五年、一四二頁。
- (5) 吉田敦彦『小ざ子とハイヌヴェレ』みすず書房、一九七六年、二一六～二一九頁。
- (6) テキストはプラーナ批判版を用いた。
- (7) *dadau ca tam nidhim amṛtasya rakṣitun/ kṛitine balabhid atha amaraiti saha//1, 17, 30cd* 「*さくじアムリタの貯蔵庫を守るため、インマラは (balabhid) 神々と共にそれをキリーティンにゆだねた。*」キリーティン (*kṛitin*) は普通マルジエナのことを指し、後にインドラをも指すようになった。ところがこの文においては、アルジュナでもインドラでも意味が通じない。ニールカントではナラのこととされており、これが妥当な読みであろう。*さくじはそのまきキリーティンとした。*
- (8) *vigatāsūni sarvaṇi satvāni vividhāni ca/ 1, 16, 23cd*
- (9) *The Visṇu Purāna: a system of Hindu mythology and tradition*, 2 vols, text in Devanagari, English translation notes and appendices, etc., translated from the original Sanskrit and illustrated by notes derived chiefly from other Purānas by H. H. Wilson, enlarged & arranged by Nag Sharan Singh, 1st ed. Nag Publish-

ers (Delhi), 1980.

- (10) 北欧ゲルマンの神話に関しては以下の文献を参考にした。谷口幸男訳『エッダ——古代北欧歌謡集』新潮社、一九七三年。菅原邦城『北欧神話』東京書籍、一九八四年。水野知昭「巫女の予言」抄訳と略注」、篠田知和基編『神話・象徴・文学』II、楽浪書院、二〇〇二年、二七～五四頁。「巫女の予言」の出典は、谷口の『エッダ』に準じた。
- (11) フクセル・オルリック著、尾崎和彦訳『北欧神話の世界』青土社、二〇〇三年、五頁。
- (12) V. M. Bedekar, "The Legend of the Churning of the Ocean in the Epics and the Purānas: A Comparative Study", *Purāna* 9, 1 (Jan. 1967): 7-61.
- (13) G. Dumézil, *Les dieux des germains*, Paris, 1959, pp. 78-104. (松村一男訳『ゲルマン人の神々』国文社、一九九三年、九六～一二五頁。) *Mythe et épopée*, Paris, 1968, pp. 222-237.
- (14) A. Hildebrandt, *The Ritual of Battle*, Ithaca and London, 1976, pp. 299-353.